

中臣遺跡発掘調査概要

昭和55年度

京都市埋蔵文化財調査センター
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

いうまでもなく京都市は、わが国随一といわれる歴史の堆積地であり、そこに埋没している遺跡、遺構、遺物は質、量ともに他の比肩を許さないものであります。

平安の開都以来、千有余年、王城の地としてわが国文化の創出、集散を重ねてきた本市の地下土層には、京都の歴史、日本の歴史が凝縮され、眠っております。さらに近年は、平安の開都以前、いわゆる先史時代の文化遺跡までも、その存在が確かめられ、いよいよ埋蔵文化財包蔵地としての評価を高めつつあります。

しかしながら、京都市はまた、古代から近代にいたるまで、王城の地として途切れることなく生きつづけ、今日もなお150万の大都会として、明日へ向って発展をつづけているという他に類例をみない特異な街でもあります。このことは、保存、保護すべき埋蔵文化財が、常に大都市の活動の前に、破壊、滅失の危機にさらされていることにほかなりません。この現状に対応するには、可能な限り、これら歴史の物証を破壊、滅失から護り、光をあて、その意味するところを解明し、位置づけをして真の歴史の構築に役立たせること、とあわせて先人の貴重な遺産として後代に引継ぐのが、われわれに課せられた責務であると考えます。

このため、10数年来、発掘調査による記録保存を中心に、微力を注いできましたが、本報告書も、昭和55年度分として、国の補助を受け、京都市埋蔵文化財研究所に、全面的に調査を委ねて得られた成果であります。これをもって、学術研究なり、文化財保護の一助にでもなれば、身に過ぎた喜びであります。

なお、調査にたずさわっていただいた京都市埋蔵文化財研究所ならびに、ご協力いただいた調査員、事業者の方々をはじめ、関係各位のご支援、ご協力に、心から謝意を表します。

昭和56年3月31日

京都市埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、京都市埋蔵文化財調査センターが、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施した、文化庁国庫補助に伴う、昭和55年度の中臣遺跡発掘調査概要である。
- 2 調査箇所は、34次、35次、36次、37次、38次、41次、43次、44次の各調査地である。
- 3 標高は、T.P.を使用している。また図中に示した方位は、真北を示す。

目 次

	頁		頁
I 34次調査	1	1 調査経過	11
1 調査経過	1	2 遺構・遺物	11
2 遺構・遺物	1	3 小結	12
3 小結	2	VI 41次調査	13
II 35次調査	4	1 調査経過	13
1 調査経過	4	2 遺構・遺物	13
2 遺構・遺物	5	3 小結	14
3 小結	8	VII 43次調査	15
III 36次調査	9	1 調査経過	15
1 調査経過	9	2 遺構・遺物	15
2 遺構・遺物	9	3 小結	16
3 小結	9	VIII 44次調査	17
IV 37次調査	10	1 調査経過	17
1 調査経過	10	2 遺構・遺物	17
2 小結	10	3 小結	18
V 38次調査	11	IX まとめ	20

図 版 目 次

- 図版一 遺跡 調査位置図
 図版二 遺跡 35次調査
 図版三 遺跡 35次調査

- 図版四 遺跡 35次調査
 図版五 遺跡 43次調査
 図版六 遺物 35次1号住出土 3号住出土

図版七	遺物	35次3・4・5号住出土 43次住居址出土	図版七	遺跡	1. SK1 2. SK2 3. SK3
図版八	遺跡	航空写真	図版八	遺跡	1. 34次 全景 2. 1号住居址 3. SK1
図版九	遺跡	1. 34次 全景 2. 1号住居址 3. SK1	図版九	遺跡	1. 36次 全景 2. 37次 全景
図版十	遺跡	1. 35次Ⅰ区 全景 2. 同Ⅱ区 全景	図版十	遺跡	1. 38次 方形周溝墓全景 2. 同遺物出土状況
図版十一	遺跡	1. 1号住居址全景 2. 同遺物出土状況	図版十一	遺跡	41次 全景
図版十二	遺跡	1. 3号住居址全景 2. 同遺物出土状況	図版十二	遺跡	1. 43次 竪穴住居址 2. 同カマド
図版十三	遺跡	1. 2号住居址全景 2. 6号住居址全景	図版十三	遺跡	1. 44次 第1面全景 2. 同掘立柱建物
図版十四	遺跡	1. 4号住居址全景 2. 同カマド	図版十四	遺跡	1. 第2面全景 2. SK1遺物出土状況 3. 同完掘状況
図版十五	遺跡	1. 5号住居址全景 2. 同カマド	図版十五	遺物	35次1・3号住居址出土
図版十六	遺跡	1. 掘立柱建物 2. SB1	図版十六	遺物	35次1・3号住居址出土
			図版十七	遺物	35次1・3号住居址出土
			図版十八	遺物	35次4・5号住居址出土 43次竪穴住居址出土

挿 図 目 次

	頁		頁
図1	調査位置図	図9	調査位置図
図2	SK1	図10	方形周溝墓
図3	遺構実測図	図11	調査位置図
図4	調査位置図	図12	調査区平面図
図5	4号住居址カマド	図13	調査位置図
図6	5号住居址カマド	図14	調査位置図
図7	調査位置図	図15	SK1
図8	調査位置図	図16	遺構実測図

I 34次調査 (図版九・図1～3)

1 調査経過

調査地点は榎ノ辻番所ケ口町29に所在し、栗栖野丘陵と山科川にはさまれた、低位段丘上に位置している。現状の地目は畑地であるが、当該地周辺はかなりの速度で宅地化が進行しており、景観が大幅に変貌しつつある。調査地点に北接した宅地は昨年度(32次調査)調査しており、その結果ピット群・溝などを検出している。

調査対象地は南北19m・東西12mであるが、当該地は積土が約1mあり、それらを含めた排土の場内処理等の制約を受け、東西6m・南北12mの範囲で調査を実施した。

基本層序は第1層耕土・床土、第2層暗茶褐色砂泥混礫層、第3層黄色泥土層(地山)である。第2層暗茶褐色混礫層が遺物包含層で、7～8世紀代の土器が出土している。

2 遺構・遺物

遺構は調査区の北半では黄色泥土層面で、南半では暗灰褐色砂礫面で検出した。

検出した主な遺構は弥生時代後期の土壌、古墳～飛鳥時代の竪穴住居址・掘立柱建物・

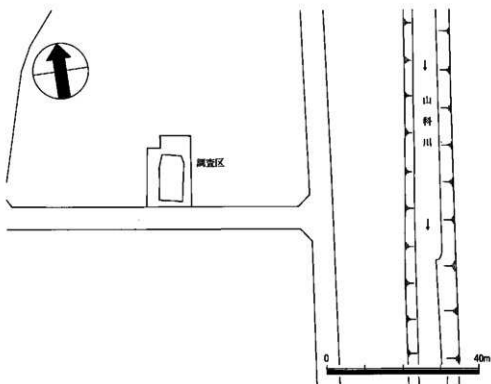


図1 調査位置図

土壌状落ち込み、奈良時代の掘立柱建物跡である。その他にピットなど多数検出したが、建物としてのまとまりを把握することができなかった。

SB1 調査区の南半で検出した掘立柱建物である。建物の南東部分は調査区外へ延びる。完全に検出できたのは北西側柱列である。柱間隔はまちまちで、全体の長さ6.16mである。柱掘形は方形と円形のものがあり、大きさは36~50cm、深さ35~50cm。

SB2 調査区北半を占め、更に調査区北側へ延びる建物である。梁行2間(4.0m)・桁行3間以上(5.4m以上)。掘形は方形で大きさは66~80cm、深さ36~52cmある。

1号住居址 調査区の南半、SB2の南西で検出した。竪穴住居址の北東コーナーと考えられるもので、壁溝及び貯蔵穴状落ち込みの一部を調査した。検出面は暗灰褐色砂礫層で、壁体上部はすでに削平され、検出面より床面まで深さ約10cm。壁溝の幅12~16cm。深さ6cm。貯蔵穴状落ち込みは床面より深さ約10cmある。出土した遺物は7世紀前半の須恵器坏身などがある。

土壌・その他 確実な土壌はSK1のみであるが、7世紀前半~中頃にかけての性格不明の土壌状落ち込みは7箇所ある。調査区南東隅で南東方向に向かってさがる自然の低湿地状落ち込みを1箇所検出している。

SK1 黄色泥土面で検出した。土壌上部はピット等により削り取られており、検出面より10cmで墳底となる。平面形は不整な楕円形を呈し長軸89cm、短軸86cm。この墳底にほぼ密着して第V様式の甕3個体分が出土した。堆積土は暗褐色泥土層で最下層であろう。

出土した遺物はこの他に7世紀前半から8世紀にかけての土師器甕・坏、須恵器甕・坏などがある。

3 小結

調査地周辺は北接する地点(32次調査)以外でも4箇所調査しており(16・21・25・26次調査)縄文から平安時代までの遺構・遺物が確認されている。このうち遺構では、古墳時代後期から平安時代前期にかけての竪穴住居址、掘立柱建物跡が特に多く検出されており、調査地周辺一帯にはかなりの密度をもって展開していると考えられる。中臣遺跡全体の中でも当該時期

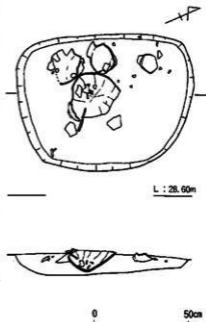


図2 SK1

における集落の展開を知るうえで、調査地周辺一帯は特に重要な位置を占めると言える。また周辺一帯は近年行なわれた土地区画整理事業の際に1～3mほど土盛りされており、旧地形の復元作業が急がれる。

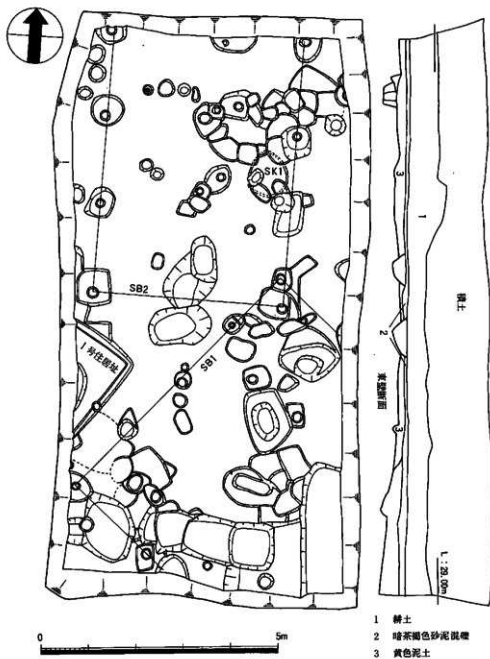


図3 遺構実測図

Ⅱ 35次調査 (図版二～四・六・七・十～十七・二十四～二十七・ 図4～6)

1 調査経過

調査地点は山科区西野山中臣町63, 65番地に所在し、栗栖野丘陵と旧安祥寺川にはさまれた低位段丘上に位置する。

調査地点に隣接する道路部分は既に発掘調査が行なわれており(2・3次調査)その際に竪穴住居跡・掘立柱建物跡等が確認されている(図4)。

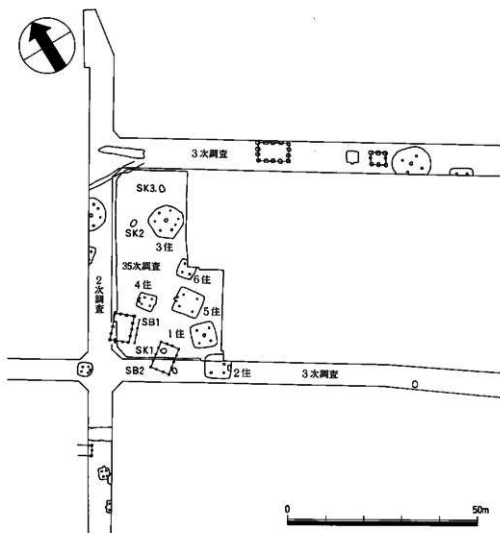


図4 調査位置図

調査は対象地全面に亘り実施したが、排土処理等の関係で、Ⅰ・Ⅱ区に対象地を分割した。Ⅰ区は24m×28m、Ⅱ区は18m×27mの範囲である。

Ⅰ区の基本層序は耕土・床土直下が淡黄褐色泥土層（地山）である。Ⅱ区の南半はⅠ区と同様であるが、北半には耕土・床土下に5～10cmの暗茶褐色泥土層があり、古墳時代後期の遺物を包含している。検出した主な遺構は竪穴住居址6戸、掘立柱建物跡2棟、土壇3基である。遺構の時期は出土した遺物より弥生時代後期及び7世紀中頃のものである。

2 遺構・遺物

1号住居址 Ⅰ区南西隅付近で検出した。平面形は方形を呈し、東西6.50m、南北6.32mある。検出面から床面までの深さ約30cmある。西及び南壁部は壁溝より約35cm外側にある。東壁部中央より南隅にかけ1.5×2.5mの範囲で床面より約10cm高くなっている個所があり、入口部かと考えられるものである。壁溝はその床面の高くなっている個所を除きほぼ全周しており、幅13～20cm、深さ4～7cmある。主柱穴は4個所あり、深さ26～30cmある。柱間隔は、北側のものから右廻りで3.40m、3.26m、3.40m、3.36mある。床面の中央に1個所ピットがあり、平面形は不整形円形を呈する。大きさは、74×76cm、深さ14cmある。貯蔵穴が東壁部中央にかかる位置にあり二段落ちを呈する。上縁での規模92×150cm、深さ9cmあり、中位での規模68×82cm、深さ15cmある。床面及び貯蔵穴より第Ⅴ様式の甕（図版六 1～3）、壺（同 4～6）、器台（同 11・12）が出土している。なお覆土中より手焙形土器等が出土している。

2号住居址 1号住居址の南側で検出した。南接する道路部分の調査（3次）の際に検出した、竪穴住居址の北東部分にあたる。なお、東隅付近は未調査のままである。平面形は方形を呈すると考えられ、壁溝も一周するものとみられる。主柱穴は4個所にあると考えられるが、北側に位置するものは検出できていない。床面中央に二段落ちを呈するピットが1個所あり、東壁部分に方形プランの貯蔵穴が1個所ある。炭化材が床面で検出されており、火災にあっている。今回の調査では少量の土器片のみが出土しているが、3次調査の際に第Ⅴ様式のものが多量に出土している。

3号住居址 Ⅱ区で検出した。平面形は六角形で、長径8.58m、短径8.39mある。南壁部に0.4m×6mの範囲で床面より約7cm高くなっている個所があり、この部分に遺物が集中している。壁溝はこのベッド状高まり部を除き一周している。壁溝の幅12～20cm、深さ5～10cm。主柱穴は7個所あり、深さは20～43cmある。柱間隔は北側に位置するものから、右廻りで3.04m、3.04m、1.82m、1.74m、3.18m、2.80m、2.54mある。床面の中央に

二段落ちを呈する方形ピットが1個所あり、上縁での規模は58×52cm、深さ8cm、ピット底まで26cm。床面で炭化材を全面に亘り検出しており、火災にあっていいる。なお、炭化材は方射状に延びており、上部構造を知るうえで興味深い事例である。床面及びベッド状高まり部で甕(図版六 13~16・22)、壺(同 17~21・23・26)、台付壺(同 24・25)高坏(図版七 27~36)、鉢を小形化したミニチュア土器(同 37・38)が出土している。4号住居址 1区の中央より北側で検出した。平面形は方形を呈し、北壁の中央部にカマドを設けている。住居址の規模は3.98m×4.08mで、検出面から床面までの深さ約10cm。壁溝はほぼ一周しており、幅約12cm、深さ約5cm。主柱穴は4個所あり、深さは24~56cmで、柱間隔は北東に位置するものから右廻りで2.10m、1.86m、1.98m、1.80mある。貯蔵穴と考えられるものは床面中央と、南壁に接する位置にあるもの2個所である。中央部に位置するものは方形を呈し、規模は53cm×98cm、深さ24cmで、南壁部のものは瓢箪形を呈し、上縁での規模56×69cm、深さ10cm、土壌底までの深さ15cm。カマドは袖部、焚口及び煙道部の一部を検出した。規模は78cm×94cm。遺物は床面及びカマド内より、土師器甕(図版七 44)、須恵器坏身が少量出土している。なお、南壁中央より東側にずれた個所を幅105cm、奥行39cmで拡張し、黄色粘土を貼っている。

5号住居址 4号住居址の南東で検出した。平面形は方形を呈し、北壁の中央より西にずれた位置にカマドを付設している。住居址の規模は6.49m×6.82mで、検出面からの深さ約15cm。壁溝はほぼ一周し、幅約16cm、深さ約5cm。主柱穴は4個所あり、深さは25~55cmで、柱間隔は北東に位置するものから右廻りで3.52m、3.62m、3.60m、3.44mある。貯蔵穴は南西隅付近にあり不整形を呈する。規模は1.46m×0.88m、深さ17cm。カマドは袖部、焚口及び煙道部の一部を検出した。規模は64cm×124cmである。5号住居址は同時期と考えられる4号住居址よりも、床面積で約3倍の規模を有する。遺物は床面、カ

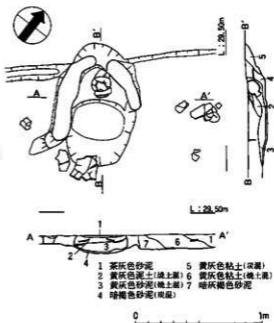


図5 4号住居址カマド

マド及び貯蔵穴内より、土師器甕（図版七 39・43）、小形壺（同 45）、須恵器坏身、甕が出土している。なおカマドの焚口部をふさぐような状態で土師器甕2個体（完形）が出土している。

6号住居址 5号住居址の東側で検出した。なお、南東コーナー付近は調査区外であり、未調査である。平面形は方形を呈し、東西4.73m、南北4.50mある。壁溝はほぼ一周し幅約15cm、深さ約4cm。主柱穴は4箇所あり、深さは25~34cmある。柱間隔は北東に位置するものから右廻りで2.54m、2.44m、

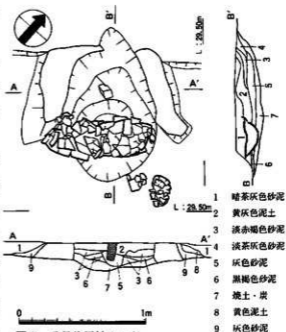


図6 5号住居址カマド

1.98m、2.25mある。出土した遺物は土師器甕片が少量出土している。なお出土した遺物からみて、4・5号住居址とほぼ同時期と考えられる。カマドが付設されている可能性が強く、調査区外に位置するものであろう。

S B 1 I区の西南で検出した。2次調査の際に北側桁行を検出している。建物は梁行3間、桁行4間からなる。桁行の柱間隔は等間で1.8m、西側梁行も等間で1.6mであるが、東側梁行は不揃いで、全体の長さは5.06mある。そのため平面形は若干いびつな方形を呈する。ピット掘形は方形及び円形で、大きさ42~58cm、深さ30~47cmある。なお、当建物に付属する施設と考えられるピット列が、南側桁行より1.5~1.65mの間隔をあけて位置している。ピット掘形は大きさ約30cm、深さ約15cmと小さく浅い。

S B 2 S B 1の南側で検出した。3次調査の際に西側梁行を検出している。建物は梁行3間、桁行4間からなる。梁行の長さ5.2m、桁行の長さ6.8m。ピット掘形は方形及び円形で、大きさ44~48cm、深さ35~48cmある。

S K 1 I区の西南でS B 1と重複する位置にある。土壌平面形は方形を呈し、大きさは1.07×1.29m、深さ23cmある。覆土の堆積状態はレンズ状で自然堆積を示し、2層に分層できる。遺物の出土状態は下層の上面に集中しており、土壌がある程度埋まった後に、土器を投棄している。出土した土器は壺・甕・高坏で第V様式のものである。

S K 2 3号住居地の北西で検出した土壌である。平面形は長楕円形で、大きさは1.21×2.10m、深さ56cmある。覆土は2層に分層できる。上層は暗茶褐色泥土混炭・焼土であるが、焼土の量が非常に多い。下層は黒灰色泥土混炭層である。遺物はこの下層より多量の土器が集中して出土しており、第V様式の甕・壺・高坏・鉢である。

S K 3 3号住居地の北東で検出した土壌である。平面形は楕円形で、大きさは1.28×1.42m、深さ24cmある。覆土は2層に分層できる。堆積状態は水平堆積を示し、人為的に埋められた形跡は認められなかった。遺物は墳底より3～4cmほど浮いた状態で集中して出土している。第V様式の甕・壺・把手付埴・高坏である。

3 小結

出土した遺物のうち、1・3・4・5号住居地のものを図示した(図版六・七)。第V様式の範疇に入るものは、図示したものを以外に2号住居地、S K 1～3より出土している。

甕の口縁部は受口状を呈するもの1と、くの字状に外反するもの2・3・13・14がある。3・15・16は小形の甕である。1は胴部外面にタタキメがあり、口縁部が外反するものはハケメ調整している。なお、15・16は胴部内面をへら削りしている。壺は口縁端部を下方に拡張するもの5・21と外方に引きだすもの19及び口頸部がわずかに外反するもの4・20がある。21は胎土が通有のものとなり、搬入品と考えられるものである。壺には他に直口の短頸壺6がある。鉢には口縁部が受口状を呈し、脚台のつく24・25がある。高坏は坏口縁部が外反するもの27・28と、直立するもの30・31及び境状の坏部をもつもの32～34がある。坏部外面を32・34はハケメ、それ以外のものはへら磨きを行なっている。

7世紀中頃の土師器甕には口縁端部が内傾し、若干匙面を呈する長胴形の39と、口縁端部を外方に引きだす43、及び口縁部がわずかに外反し直立気味に立ちあがる44がある。胴部外面はすべてハケメ調整である。口縁部はヨコナデするが、39の口縁部内面はハケメ調整のみである。なお、この39の甕は所謂、近江型と呼ばれているものである。

検出した遺構は、弥生時代後期の竪穴住居地3戸、土壇3基、7世紀中頃の竪穴住居地3戸、掘立柱建物2棟である。S K 2は覆土及び遺物の出土状態等から、焼失した竪穴住居地の廃材、焼土、土器等を投棄した土壇と考えられる。3号住居地は平面形が六角形を呈している。10次調査の際に多角形の住居地が1箇所検出されており、現時点では2箇所目の確認といえる。なお、弥生時代の住居地は全て炭化材が床面で検出されており、焼失家屋である。7世紀中頃の住居地のカマドの主軸方向は、北向きの4・5号住居地と東向きに付設された6号住居地の2グループがあり、集落の展開を考えるうえで興味深い。

Ⅲ 36次調査 (図版十八・図7)

1 調査経過

調査地点は、栗栖野丘陵のほぼ南端に位置し、北約25mには比高差約3mの段丘がある。地目は水田である。調査対象面積は1350㎡であるが、宅地造成の擁壁及び2mの積土がなされていたので調査面積は積土の比較的少ない西側の200㎡ 足らずである。

トレンチは20×6mのA区と、その北東部に4×8mのB区を設定した。基本層序は、耕土・床土が40cmありその下が地山の黄灰色泥砂層である。A区南半部では、地山の傾斜面に堆積した黒灰色泥土層があり、厚い所で20cmを測る。

2 遺構・遺物

検出した遺構は土壌が2基である。A区南端で検出した土壌は、南側を擁壁工事で破壊されている。平面形は3.3×1.3mの長方形を呈し、中央南側が楕円形に一段低くなっており、深さは80cmある。埋土には焼土、灰が混入する。出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。B区北東隅で検出した土壌も大半が破壊されている。

出土遺物は主に床土からで、須恵器・中世磁器の細片がある。

3 小結

調査地の北側に接する市街化道路16号線の調査では、3・4世紀の竪穴住居址、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。周辺には当該期の集落が展開しているとみられる。

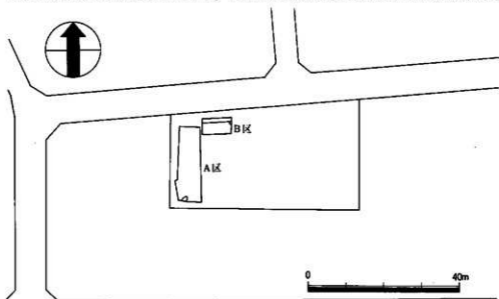


図7 調査位置図

IV 37次調査 (図版十八・図8)

1 調査経過

栗栖野丘陵は山科川と旧安祥寺川にはさまれ、両河川の合流点に向ってゆるやかな傾斜を示しながら舌状に張り出している。

調査地点はこの南方に向って舌状に張り出した丘陵の先端部付近に位置し、山科区勤修寺西栗栖野町7番地に所在する。調査地点は田中俊暢氏の所有地で、将来建築計画があるため、それに先立ち事前に発掘調査を実施した。

当該地は近年に行なわれた土地区画整理事業施行地である。そのため、当該事業の施行時に、耕土・床土及び遺物包含層をすべて削り取り、土の入れ替えを行なったようである。すなわち、調査地点の基本層序は積土の直下に暗灰褐色砂礫層があり、この層中からは遺物がまったく出土しなかった。また、この層の堆積状況は自然堆積を示している。このことから地山であると判断した。なお、北接する道路法面を観察すると、周辺の調査で地山であると考えられている黄灰色泥土層が、この砂礫層の上面に堆積している。

遺構はまったく検出しなかった。なお、遺物は積土中より少量の土器片が出土した。

2 小結

周辺の畑地には遺物が若干散布しており、何らかの遺構が存在していると考えられる。

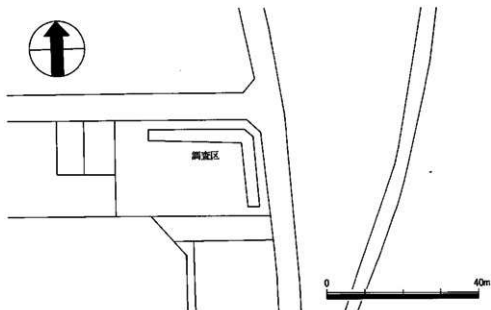


図8 調査位置図

V 38次調査 (図版十九・図9・10)

1 調査経過

調査地点は山科区勤修寺西栗栖野町32-A・Bに所在し、栗栖野丘陵頂部より西方に向けて傾斜する緩斜面上に位置する。調査対象地が東・西の2個所に分かれており、東側をⅠ区西側をⅡ区とした。Ⅰ区は4×4mのグリッドで、Ⅱ区は2.5×21mのトレンチで調査を実施した。Ⅰ・Ⅱ区の基本層序は第1層耕土、第2層黒色砂泥、第3層黄色泥土(地山)である。遺物包含層は第2層で、この層中より須恵器片が少量出土している。遺構はⅠ区の北東隅で方形周溝墓を1基のみ検出した。

2 遺構・遺物

方形周溝墓の溝は途切れることなく全周しているが、南西隅で内壁肩と外壁肩間が28cm深さ24cmと狭く浅くなっている。マウンド及び主体部は後世の開墾により削平されており、まったく検出できなかった。ただし、溝内堆積土の観察結果より、主体部側から流下して堆積した状態を示しており、マウンドが存在したものと考えられる。遺物は南側周溝内のみに見られ、第V様式の甕2・壺2個体及び鉄鏃1が出土している。甕の1個体は溝底よ

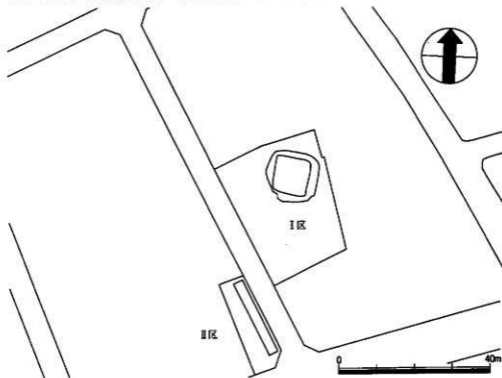


図9 調査位置図

り約8cm程浮き完形の状態、他の3個体は全て溝底に密着し、破砕した状態で出土している。規模は溝の心々間で東西11.5m、南北11.3m、周溝の幅1.8~2.5m、深さ28~44cm。

3 小結

丘陵の頂部から斜面部にかけて弥生時代の墓域が展開しているものと考えられるが、これら墓域を区画する何らかの施設は、現在まで確認されておらず今後の課題である。

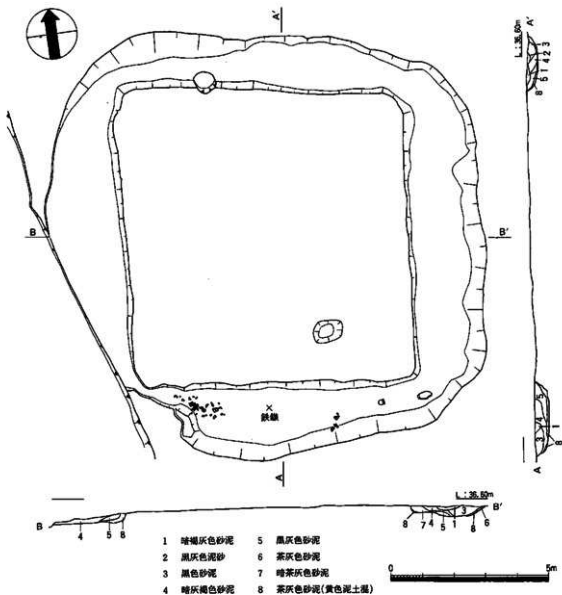


図10 方形周溝墓

VI 41次調査 (図版二十・図11・12)

1 調査経過

調査地点は、36次調査地点から南東約50mに位置する。地目の現状は水田で、調査対象面積は150㎡である。調査地の南に接する市街化道路17号線は、昭和52年に調査がなされ、古墳時代の遺物包含層を確認している。他にも当調査地の周辺では縄文～平安時代の遺構・遺物が検出されている。

トレンチは、22×4mを設定した。基本層序は、耕土・床土が約60cmあり、以下トレンチの南側では暗褐色砂泥層・黒褐色砂泥層・黄灰色泥砂層の順に堆積する。暗褐色砂泥層は、古墳時代の遺物包含層で厚さ20cm、黒褐色砂泥層は、地山が南に向けて一段低くなった所に堆積した無遺物層で、厚さ30cm。トレンチの北側では床土の下が直接地山となる。検出した遺構は竪穴住居址1・掘立柱建物1・土坑1・溝1である。

2 遺構・遺物

S B 1 黒褐色砂泥層上面より検出した。建物の柱列は南北3間、東西1間分を確認した。

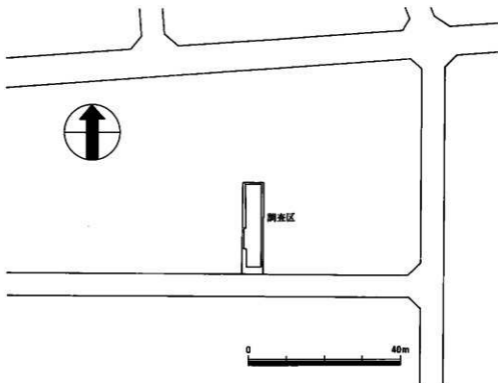


図11 調査位置図

この建物は、西側へさらに数間延びる東西棟と考えられる。柱間寸法は200cmで、東側柱列の南・北1間が150cmである。柱穴掘形は50～60cmの円形を呈し、深さ約40cmである。柱穴掘形からは飛鳥～奈良時代の土師片が少量出土している。

1号住居址 トレンチの北側で検出した。攪乱や未調査部分が多く、全体の規模は不明。平面形は隅丸方形と考えられる。検出面から床面までの深さ30cmで、床面の状況は、北半部が地山の砂礫層で、貼床はされていない。壁溝は幅15～20cmで深さ5～7cm。柱穴は2箇所検出しており、径が25cm、深さ30cmである。住居址南西部で大半が攪乱を受けた貯蔵穴を確認。深さ30cmある。遺物は、北側壁溝寄りの床面で土師器の壺1個体分を検出している。

その他の遺構 SK1は、1号住居址の南約1mで検出した土壇である。深さ45cmあるが、全形は不明。SB1の南3.60mで、東西方向の溝(SD1)を検出した。幅は50～100cm、深さ25cm。遺物は、古墳時代後期の須恵器が少量出土している。

3 小結

今回は狭い範囲での調査であったが、遺構を確認することができた。既往の調査例をみると、弥生～古墳時代の遺構が集中して検出された地域は当該地の北西部と南東部で、今回検出の住居址などは集落の形成を解明するうえで一つの成果といえる。

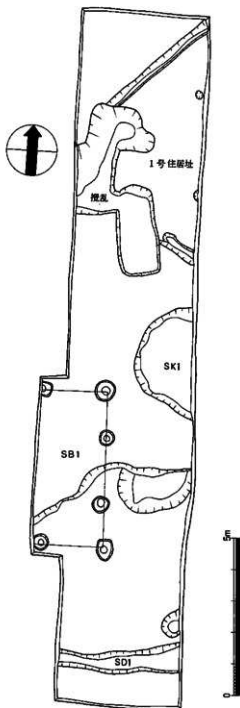


図12 調査区平面図

Ⅶ 43次調査 (図版五・七・二十一・図13)

1 調査経過

調査地は山科区勤修寺西金ヶ崎89-3番地で、現状の地目は畑である。当該地は栗栖野丘陵の南西斜面にあり東から西に向けて急激に傾斜する丘陵の西端部に位置する。調査地のすぐ西側は比高差約3mの段があり、低位段丘となって旧安祥寺川に至る。

丘陵斜面における既往の発掘調査をみると、遺構の検出例は低位段丘部に比べ比較的小さいことが指摘できる。しかし、今回の調査地の東に接する市街化道路の調査では、掘立柱建物・竪穴住居址が検出されており、検出場所も数mしか離れておらず、何らかの遺構の検出が期待できた。

調査対象面積は299㎡で、その中央に18×11mのトレンチを設定した。基本層序は耕土・床土が30cmあり、その下がすぐ地山の黄灰色粘質土となる。地山面はトレンチの東側から平坦につづき、トレンチ西壁に沿って急激に西へ落ち込む。検出した遺構には、竪穴住居址・柱穴・近世以降の溝状遺構がある。

2 遺構・遺物

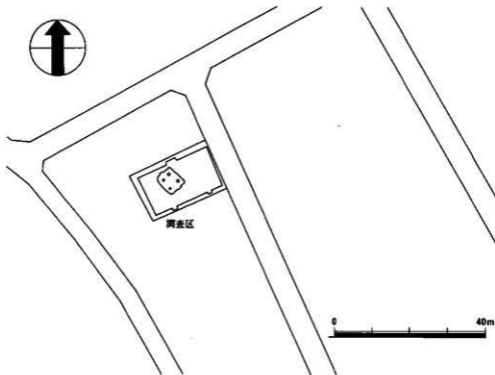


図13 調査位置図

トレンチの中央北寄りで竪穴住居址を検出した。住居址の壁体部は良好に残存するが、中央部分は後世の大きな土壌によって破壊されている。平面形は5.6mのほぼ方形を呈するが、南・西側についてはわずかに短く、南壁の中央部は外方に向けて張り出している。検出面から床面までの深さは、残りの良い所で約22cmある。覆土は暗褐色砂泥で、住居址の南西部にカマドの袖部に使用したと考えられる黄色粘土が投棄されていた。壁溝は幅20~25cm、深さ5~10cmあり、南壁中央の1.5m間はとぎれる。柱穴は4箇所あり、掘形の径は64cm、深さは最も深いもので74cmある。それぞれの柱間隔は2.9mである。南西の柱穴は掘りかえた痕跡がある。カマドは北壁中央からやや東寄りにあり、支石をもつ。なお、東側のカマド袖部の下に別のカマドの痕跡があり、作り変えがなされたと考えられる。貯蔵穴は住居址の北東コーナーにあって、平面形は78×100cmの長方形を呈し、深さ30cmある。貯蔵穴も改変されており、貼床を除去すると、95×133cmのひとまわり大きなものを検出した。床面は、固くしまった淡黄色粘質土による貼床で、上・下2面を確認した。貼床は住居址の中央部、カマド付近及び4箇所ある柱穴付近が最も厚く、壁溝周辺部には貼床はなく、踏み固まった痕跡もない。遺物は、カマド内から須恵器の埴6個体(図版七 49~54)、土師器の長甕3個体(同 40~42)が出土しており、床面からのものは少ない。他には住居址廃絶直後に投棄されたものと考えられる土師器の埴が3個体(同 46~48)ある。古墳時代後期以後の遺物である。

3 小結

今回検出した竪穴住居址は、これまで調査されたなかで、前述した市街化道路の1戸を含めて、中臣遺跡では最も高い位置で検出した竪穴住居址である。栗栖野丘陵西斜面で、特に標高33m以上における弥生~古墳時代の遺構の分布状態をみると、方形周溝墓・古墳・土壌墓の検出例が多い。また伝宮道烈子墓と呼ばれている古墳も調査地の近くにあり、墓域としての性格が強い。これまでに低位段丘部で重複して、多く検出された住居址群とは離れて存在するこれらの住居址は、集落内でどのような性格を持つか、集落の構成を解明するうえで今後の重要な資料となりうる。また、住居址の規模・構造などについても細かく比較検討する作業も今後の課題である。出土した遺物についてその概要を記すと、長甕とした40~42は口縁端部が内傾し、わずかに匙面をもつ。口縁部から胴部にかけての内外面をハケメ調整する。41の口縁部外面はヨコナデで、ナデ消している。40は胴部下半をヘラ削りしている。埴には口縁端部がやや外傾し、肥厚するもの46・48と直立気味のもの47がある。内面には放射状の暗文がある。

Ⅶ 44次調査 (図版二十二・二十三・図14~16)

1 調査経過

調査地点は山科区西野山中臣町72-77に所在する。中臣神社の境内に位置し、南東約50mの地点に伝宮道烈子墓と呼ばれている古墳が存在する。

調査対象地は東西13m・南北26mである。排土を場内処理するため調査区を東西10m南北15mの範囲で設定した。当該地の基本層序は第1層耕土、第2層黒色砂泥、第3層黄色泥土層である。第2層が遺物包含層で、この層中より少量の須恵器片が出土している。検出した主な遺構は掘立柱建物3・溝1・土壇3である。

2 遺構・遺物

S B 1 調査区の南西に位置し、調査区外の西側に延びる2間×3間以上の掘立柱建物である。検出した柱列は、北側柱列及び東側柱列である。柱間寸法は北側柱列 2.2m、東側柱列 2.2mである。掘形は方形で80cm~90cm、深さ40cm~48cmある。

S B 2 S B 1の南西に位置し、S B 1の建て替えの可能性ある。調査区外の西に延びる建物で、東側柱列と、北側柱列の一部を検出した。柱間寸法は東側柱列 2.2m、北側柱

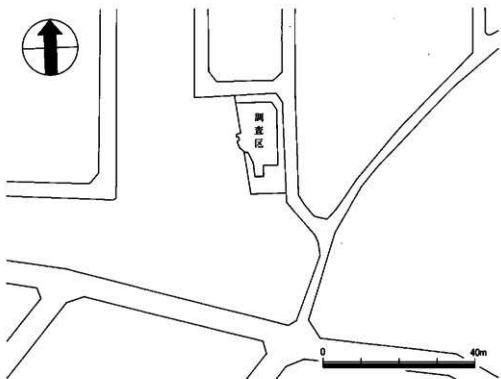


図14 調査位置図

列 1.8mでSB1に比べ若干小ぶりの建物である。柱掘形は方形で一辺65cm～76cm、深さ24cm～40cmと小さく、浅くなる。SB1・SB2とも東側柱列は真北方向である。

SB3 SB2の南東に位置する掘立柱建物と考えられる柱列で、調査区外の西・南に延びる。検出したのは北西-南東方向の2間分で、柱間寸法は1.9m、掘形は円形で約70cm、深さ約25cm。ただし櫛の可能性も考えられるものである。

SD1 調査区の中央よりやや北側に位置する東西方向の溝である。堆積土は1層のみで黒色砂泥である。溝の肩口での幅60cm～90cm、深さ18cm～20cm。

SK1 SB1の東側に位置する土壌である。SB1の柱掘形により一部掘り取られている。土壌掘形の平面形は方形を呈して、掘形の中央部には、主体部と考えられる落ち込みがある。この主体部内の堆積土は3層に分層できるが、自然堆積の状態を示している。またこの主体部の肩口に供飯用と考えられる壺1・甕1個体分が、土壌内部に向かって傾斜する状態で出土している。土壌掘形の規模90cm×130cm、深さ20cm。主体部の規模は51cm×107cm、深さ47cm。

SK2 SK1の西約3.5mに位置する土壌である。平面形は小判形を呈し、堆積土は2層に分層できるが自然堆積を示している。検出面での規模96cm×210cm、深さ30cm。遺物の出土状態は散在しており、SK1のあり方とは異なっている。

SK3 SK2の南東に接近して位置する土壌である。土壌の平面形は隅丸方形を呈し、検出面での規模120cm×220cm、深さ45cm。堆積土及び、遺物の出土状態はSK2に類似している。

3 小結

弥生時代の遺構は溝1と土壌3基である。土壌のうち、SK1としたものは土壌墓と考えられるが、他のものは性格不明である。出土した遺物よりみて、これらの遺構の時期は弥生中期前半から中頃にかけてである。掘立柱建物は古墳時代後期のSB3と奈良時代のSB1・2である。周辺には当該時期の墓地、集落跡が展開していると考えられる。

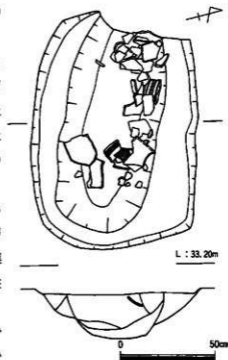


図15 SK1

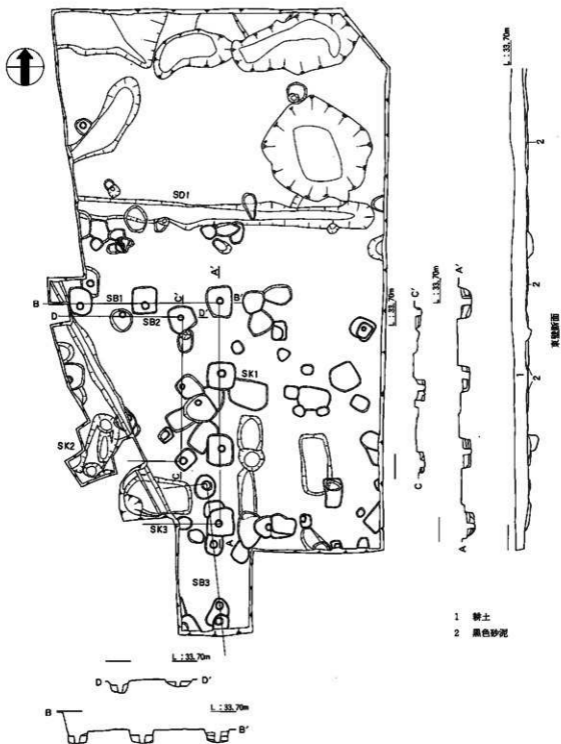


图16 遗构实测图

X ま と め

本年度の調査成果をまとめると、主な遺構としては弥生時代中期の土壇3・溝1、後期の竪穴住居址3・方形周溝墓1・土壇4、古墳時代前期の竪穴住居址1、後期の竪穴住居址5・掘立柱建物跡4・土壇状落ち込み多数、奈良時代の掘立柱建物跡4である。その他に建物としてのまとまりは追求できなかったが多数のピットなどを検出している。調査地点が中臣遺跡全体の中に点在しており、各時代にまたがる多種多様な遺構を検出している。出土した遺物は弥生時代から中世にいたるまで、断続的ではあるが各時代に亘っている。

35次及び2・3次調査で検出した弥生時代後期の竪穴住居址のプランは円形・方形・多角形と多様なあり方を示している。また火災に遭遇している住居址が多い。当該時期の住居址群は3次調査区の南東部付近で分布密度が薄くなっており、35次調査区周辺で密度が濃くなっている。このことは共有の生活基盤のうえに立つ集落内における単位集団的なあり方を示すものであろうか。今後の大きな課題である。

38次調査区で方形周溝墓を検出している。丘陵部に立地する方形周溝墓は38次調査例の他に、38次調査区北西約120mに位置する地点(27次調査)で2基、44次調査区の東約10m(1次調査)で1基検出している。低位段丘部では2箇所、6基検出している。1箇所は旧安祥寺川に近接する地点(15次調査)、他は山科川と接する地点(23次調査)である。

中臣遺跡におけるこれまでの発掘調査は、大半が土地区画整理市街化道路を対象として行われてきた。土地区画整理市街化道路が整備された2～3年ほど前からは、市街化道路に面して宅地化が急速に進み、発掘調査は宅地を対象に行なわれるようになった。

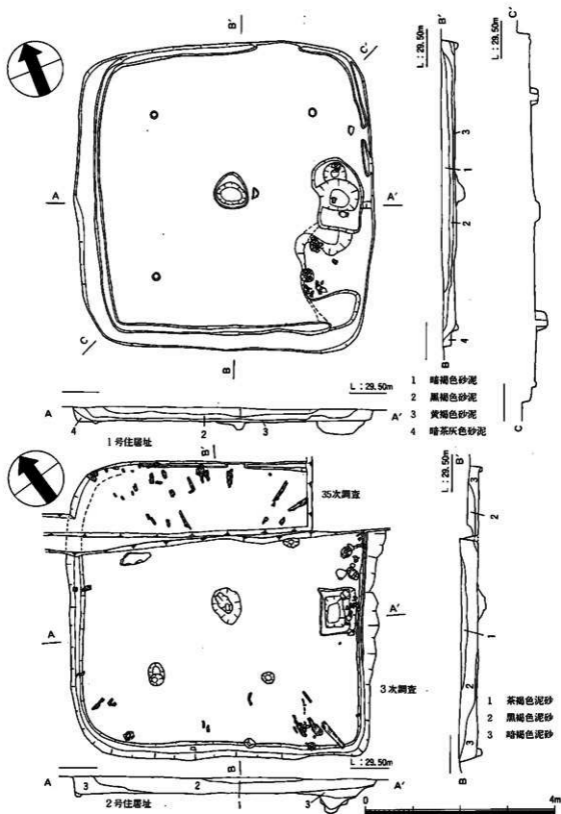
市街化道路の発掘調査では多期多様にわたる遺構等が検出されたが、対象地が道路数部分に限定されていたため、調査対象地内で完結するものはほとんどなく、大半は調査対象地外へ広がる。しかし、宅地化の波とともに市街化道路に沿って発掘調査が行なわれてくると、市街化道路における発掘調査成果が再度確認されることになった。今回の35次調査では、市街化部分に対して行なった2・3次調査で検出された遺構の続きが検出でき、完結する遺構を多数確認した。

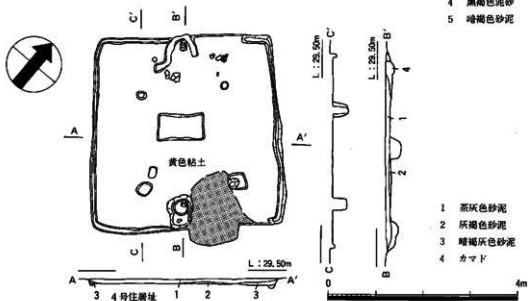
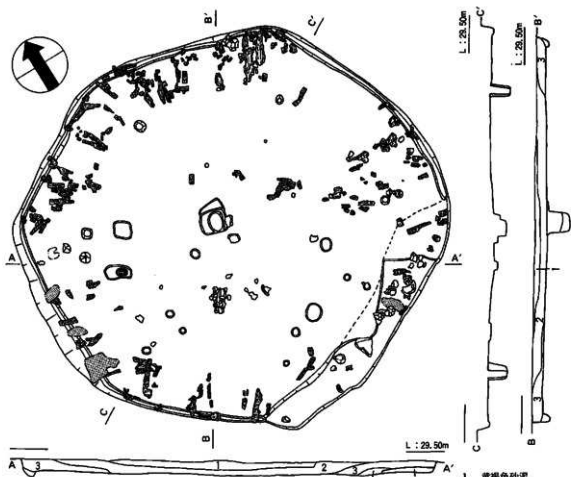
今後、急速な宅地化によって35次調査のような例が増加すると考えられ、それに伴って個々の関連する遺構を、面的な広がりをもって追求することが可能となろう。また、調査件数も急速な宅地化により大幅に増加するであろう状況の下で、中臣遺跡の全体像をより正確に把握するためには、より綿密な調査計画と正確な記録が必要である。

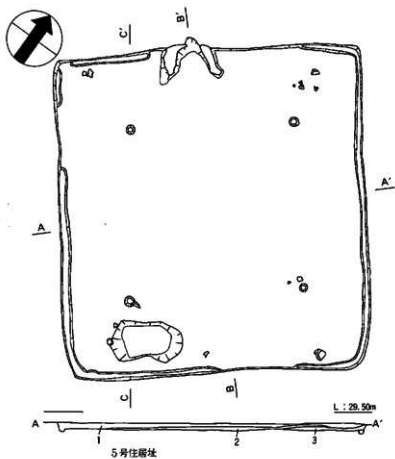
图 版



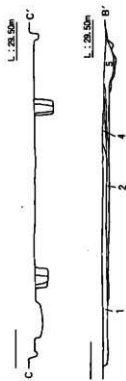
調査位置図



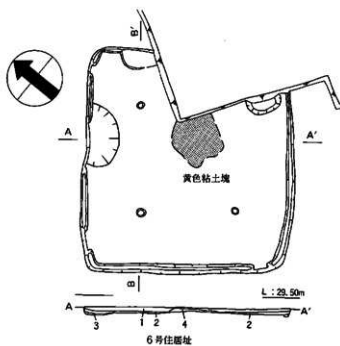




5号住居址



- 1 暗茶灰色砂泥
- 2 茶灰色泥砂
- 3 茶褐色砂泥
- 4 黄色粘土
- 5 カマド

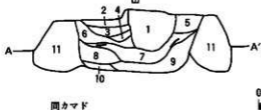
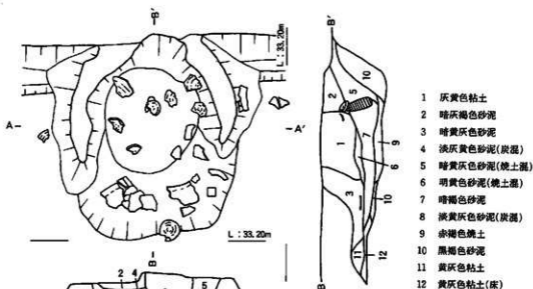
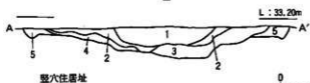
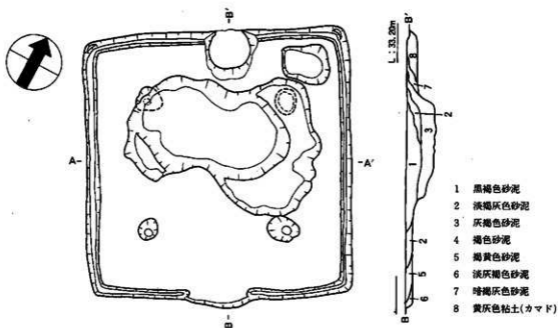


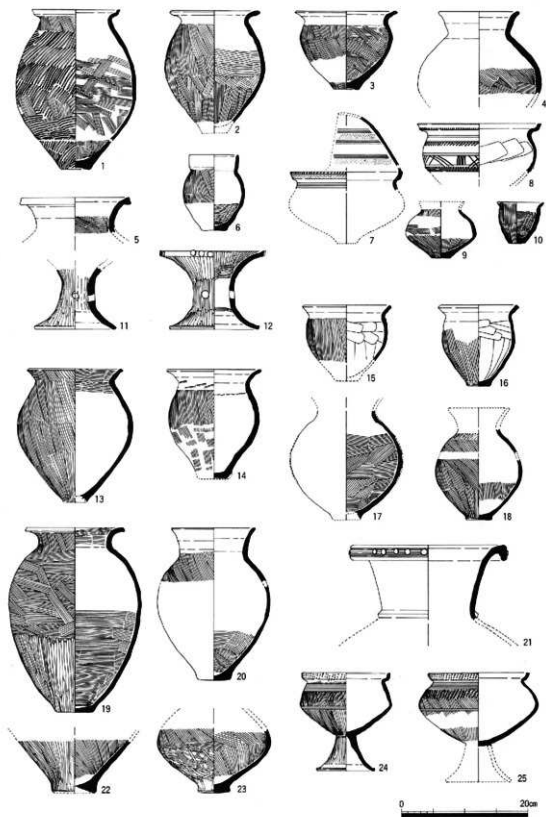
6号住居址



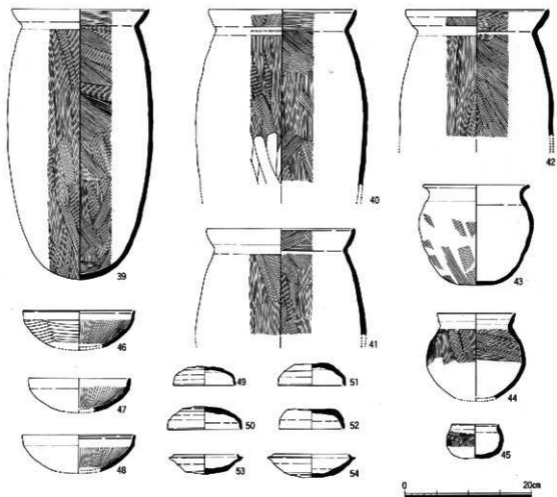
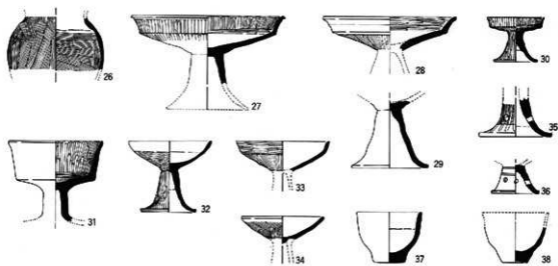
- 1 茶褐色砂泥
- 2 暗褐色泥砂
- 3 黒褐色泥土
- 4 黄色粘土



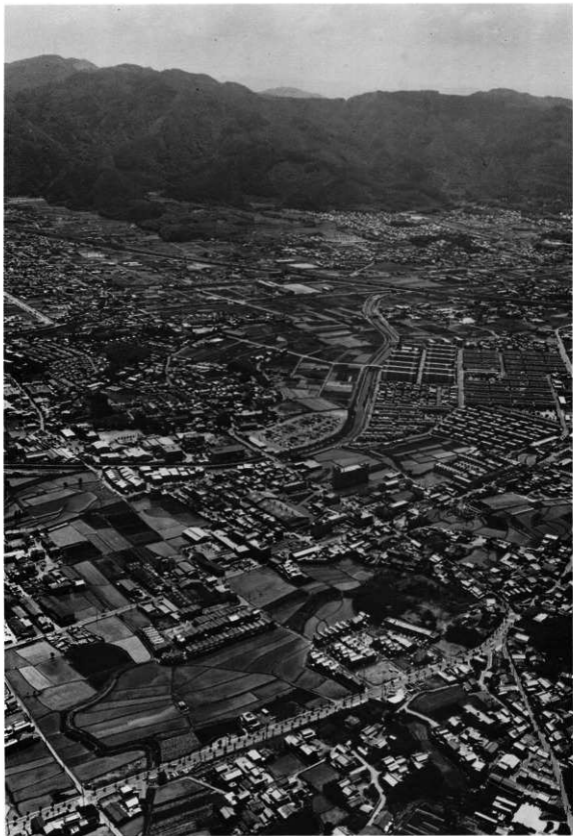




35次1号住出土(1~12) 3号住出土(13~25)



35次3号住出土(26~38) 4号住出土(44) 5号住出土(39·43·45)
43次住居址出土(40~42·46~54)



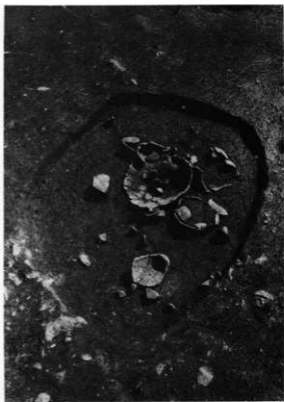
航空写真



1 34次 全景



2 1号住居址



3 SK1



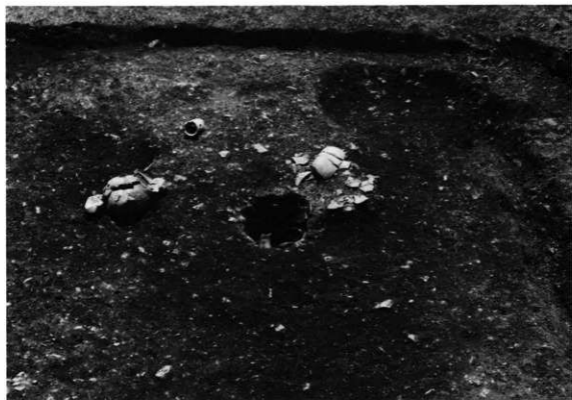
1 35次I区 全景



2 同II区 全景



1 1号住居址全景



2 同遺物出土状況



1 3号住居址全景



2 同遺物出土狀況



1 2号住居址全景



2 6号住居址全景



1 4号住居址全景



2 同カマド



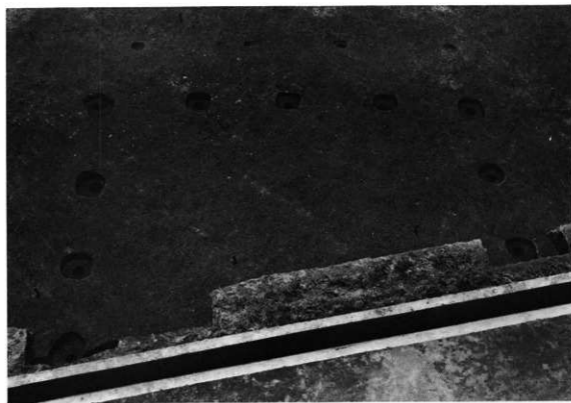
1 5号住居址全景



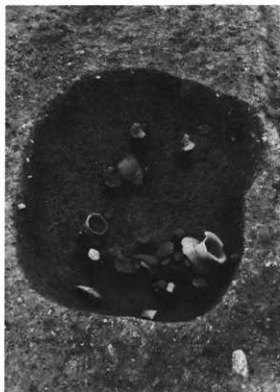
2 同カマド



1 掘立柱建物



2 SBI



1 SK1



2 SK2



3 SK3



1 36次 全景



2 37次 全景



1 38次 方形周溝墓全景



2 同遺物出土状況



41次 全景



1 43次 竪穴住居址



2 同カマド



1 44次 第1面全景



2 同掘立柱建物



1 第2面全景



2 SK1 遺物出土状況



3 同完掘状況



8



3



14



16



1



13



35次1号住居址出土(4·6), 3号住居址出土(19·21·24·37)



27



30



31



12



32





45



49



52



53



43



48



39



44

35次4号住居址出土(44), 5号住居址出土(39・43・45)
43次竖穴住居址出土(48・49・52・53)

中臣遺跡発掘調査概要

昭和55年度

発行日 昭和56年3月31日
発行 京都市埋蔵文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 441-5261
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521
印刷 真 陽 社